

—調査報告—

介護老人福祉施設における看護職のターミナルケアの取り組み

青田正子¹ 太田節子²

¹明治国際医療大学看護学部

²滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

要旨

本研究は、介護老人福祉施設の要介護高齢者に対する看護職のターミナルケアの取り組みを明らかにすることを目的とし、看護職7名に面接を行いKJ法の手法を使用した質的研究を行った。逐語録から作成したラベルは102枚で、ラベルの志の近さでグループ編成を実施し、59枚のラベルから表札づくりを開始した。その結果、最終表札であるシンボルマークが7つ明らかにされた。ターミナルケアの取り組みの7つのシンボルマークから看護職は、【慮（おもんばか）り苦痛を緩和する】ケアを行い、【高齢者をトータルに捉えるケア】や【家族の様なケア】を考へて看取りをするが、施設ケアの限界に【ターミナルの段階を理解できず悩む】気持ちを抱きながら、【最後までその人らしさを大切にするケア】を実践している。その背景には、【社会が看取る時代の流れ】と【介護職の専門性を尊重する】連携が必要となることが示唆された。

キーワード：介護老人福祉施設、看護職、ターミナルケア

I. はじめに

2009年の調査では、日本の高齢化率は22.7%（国民衛生の動向，2010）であり超高齢社会を迎えている。それは、75歳以上の後期高齢者の増加や重度な要介護度の高齢者が増加し、その死亡が増える社会であり、今後の高齢者ケアの重度化は高齢者政策の中心的な課題になるとされている（堀田，2003）。2006年の介護報酬改訂では、介護老人福祉施設における入所者の重度化等への対応を考慮し「重度化対応加算」が設けられ、更に一定の要件を満たした場合に対する「看取り介護加算」も新設された。しかし、ケアの重度化や看取りに対する加算体制の整備は始まったばかりであり、介護施設にとって看取りは新しいケアの試みでもある。介護老人福祉施設では、常時介護が必要で、在宅で介護が受けられない事情を持つ高齢者が終の棲家として長期的にケアを受けながら、人生の終焉を迎えている。そこで、高齢者生活と介護老人福祉施設のケアの質の向上を検討するため、介護老人福祉施設における看護職の取り組みを明らかにしたいと考えた。

II. 研究目的

看護職の介護老人福祉施設のターミナルケアの取り組みを明らかにし、介護老人福祉施設のターミナルケアを構築する基礎資料を得ることである。

III. 研究方法

1. 用語の操作的定義

ターミナルケア：「死期が近づいたことを予見した上で、死を安らかに迎える準備を意識した、心身両面にわたるケア」（2000，広井）とし、本研究ではターミナルケアと看取りは同意語とする。

看護職：本研究では、看護基礎教育課程を修了し、看護師免許又は准看護師免許を有し、介護老人福祉施設においてターミナルケアの経験を持つ者とする。

2. 研究対象

施設と利用者を取りまく社会的環境の理解が得られ易いことから、京都府下A地区にある介護老人福祉施設をインターネットのWAM-NET (<http://www.wam.go.jp/kaigo/>)で検索した。そのうち研究協力が得られた施設で、施設長より推薦を受け、3年以上の施設ケアの勤務経験を有し、

表2 ターミナルケアの取り組みの分析

	シンボルマーク	第2段階 表札	第1段階 表札	ラベル
1	慮（おもんばか）り苦痛を緩和する		あきらめないで苦痛を取り除くケアを目指している	<ul style="list-style-type: none"> ・少しでも前向きにターミナル期方が生きてゆける様に寄り添うケアをしたい ・清潔・痛み・苦痛への援助がターミナルケアの特徴である ・アロマセラピーなどの療法が苦痛や病みに効果がある
			一匹狼→	・慮る推察するようなケアがターミナルケアである
			一匹狼→	・ターミナルの方の苦痛を緩和する環境を整えることが大切なケアである
2	高齢者をトータルに捉えるケア	ターミナルケアは日常の延長上にあり高齢者をトータルに統合体として捉えたい	ターミナルケアをめぐるトータルな学びを充実させたい	<ul style="list-style-type: none"> ・ほかの施設ではどのようなターミナルケアの取り組みをしているのか看護の考えを聞きたい ・自分がどのような環境で最期を迎えたいのか？となげかける教育が必要 ・家族への心理的な支援のケアについて講習会を開いてほしい ・死生観をケア実践者が持てる様に研修することが必要 等

			生活史も含め統合体として高齢者を捉えたい	<ul style="list-style-type: none"> ・医学的に老化を成熟の時期と捉えて1人の統合体として高齢者のターミナルケアにしたい ・その方の生活史を知っていないと具体的なケアはできない
			高齢者の日常の延長上にターミナルステージがあり特別なものではない	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルケアは高齢者の反応を判断する難しいが特別なものではない ・ターミナルケアは日常の生活の延長上にあります
3	家族の様なケア	ターミナル期にある家族を支えたり家族に代わるケアを行う	看取りの時後も家族と共にケアをしたい	<ul style="list-style-type: none"> ・看取りのケアは亡くなる時だけではなくその後の死後の処置も家族と共に行きたい ・家族に見守られてご本人の意見も尊重され死を迎えていただきたい ・認知症や身寄りのない方のターミナルケアでは私達が家族の様な代弁者になる
			ターミナルケアの家族のその時々が変わる思いや家族と疎遠の方へのケアが難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルケアの方針を決めても家族の思いはその時々が変わるので柔軟に受け取りたい ・ここで最期をと希望されても家族の思いが変わったりやっぱり病院に行きたいと云われる
			一匹狼→	・家族のおられない方は遠い親戚の方が最後の意思決

				定をされるので難しいと思う 等				み・苦しみを忘れていてくれるのです
4	ターミナルの段階を理解できず悩む	ターミナルの段階を理解出来ず医療とのはざままで介護職看護職は悩む	「食べられない」ターミナルの状況を理解出来ず介護職も看護職も点滴を希望する	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職は「食べられなくて」やせていくのがつらいので点滴を希望する人がいる ・病院に長く勤めていた看護職はすぐに点滴をしたがる ・「食べられない」ターミナルの状況を介護職は最初は理解してくれない ・点滴をすればなんとかかなる！点滴信仰の様なものを抱く介護職がいる等 			最後のステージに自覚的に向き合うケアが大切です	<ul style="list-style-type: none"> ・最後のステージをどのように支えるかがターミナルケアでは大切です ・スタッフが死と向き合うことがターミナルケアには大切である
			ターミナルの段階での入院の判断に悩む	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルの病状の段階で病院にやはり行ってもらうべきなのか？判断に迷う ・入院されたら楽になるのか？判断に迷う 	6	社会が看取る時代の流れ	一匹狼→	<ul style="list-style-type: none"> ・家ではなく病院ではなく施設で看取りを重視する時代の流れに高齢者の現在の状況を思う
					7	介護職の専門性を尊重する	ターミナルケアにおいて看護職と介護職は互いにその専門性を評価し合い尊敬することが望ましい	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職が高齢者に対して親密で質の高い関係のケアをしていることを評価したい ・ターミナルケアでは看護の出番がない位慣れた介護職がしっかりケアしている ・介護職は泣きながら死後のケアをしている。悲しみを素直に出せてうらやましい ・ターミナルケアでは看護の出番がない位慣れた介護職がしっかりケアしている ・介護職の仕事を評価することはターミナルケアでは特に大切である
5	最後までその人らしさを大切にケア	ターミナルケアの対象者の状況は多様であるが死期が近づくことに自覚的に向き合うケアが大切	一匹狼→	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルケアの対象者は高齢で病弱・癌・老衰の方である 				
			死期が近づくと死臭や体が小さくなるなどの変化が起こる	<ul style="list-style-type: none"> ・死期が近づくと死臭がします。だから清潔は大切なケアです 				
			認知症の方は状況を把握しておられないことが神様からの贈物の様に見える	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症は神様からの贈物と思っっている。彼等は自分の状況を忘れているから ・認知症の方が「がん」の場合でも痛 				<ul style="list-style-type: none"> ・介護職にも看護職にもターミナルケアの特徴を理解したバランスのあるケアが求められる ・介護職には施設は病院と違うことを知ってほしい ・高齢者のターミナルケアについて看護師でも理解していない人がいる ・ターミナルケアだから「～してあ

			<p>げたい」と言う様ななかたよりのあるケアは良くない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者のターミナルケアについて看護師でも理解していない人がいる 						たい 等
		<p>介護職・看護職はお互いに忙しいが経験によるケアのこだわりを無くし介護の専門性を確立させてほしい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は忙しくて介護士と看護師の間でターミナルケアの討論をする時間はない ・長い間施設ケアに携わる良い意味でも悪い意味でも「こだわり」がケア提供者にある ・介護職の人にもターミナルケアでの自分の専門性をしっかり確立してほしいと思う ・現在は忙しくて介護士と看護師の間でターミナルケアの討論をする時間はない 等 			<p>看護職は医療的な根拠と客観性で介護職のターミナルケアをサポートするべきである</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・若いスタッフ（介護職）が落ち着いてケアできるように看護職はしたい ・介護職がターミナルケアを実践できるようにサポートするのが看護の仕事と思う ・根拠が地に足がついた様なケアのあり方が看護のターミナルケアある ・根拠が地に足がついた様なケアのあり方が看護のターミナルケアある ・病院でのターミナルケアではなく介護職のケアを支えることが施設の看護の役割と思う等 	
		<p>介護と看護それぞれの視野と専門性を尊敬し合い連携する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルケアはお互い（介護職）と太いパイプを作るように連携しよう ・介護を中心とし看護も入ってターミナルケアの振り返りをし総合的に色々な視野をもちたい ・看護は、ターミナルケアでの自分の領域と立場を知って他職と連携する ・介護も看護もそれぞれの専門性に立って尊敬し合い認め合って連携し 						

- 1) 【慮（おもんばか）り苦痛を緩和する】
このシンボルマークには、「慮（おもんばか）り推察するようなケアがターミナルケアである」等のラベルが認められた。
- 2) 【高齢者をトータルに捉えるケア】
このシンボルマークには、「生活史も含め統合体として高齢者をとらえたい」や「ターミナルケアをめぐるトータルな学びを充実させたい」等のラベルが認められた。
- 3) 【家族の様なケア】
このシンボルマークには、「家族と共に看取りをしたい」等のラベルが認められた。
- 4) 【ターミナルの段階を理解できず悩む】
このシンボルマークには、「食べられないターミナルの状況を理解出来ず介護職と看護職も点滴を希望する」等のラベルが認められた。
- 5) 【最後までその人らしさを大切にケア】
このシンボルマークには、「最期のステージに自覚的に

向き合うケアが大切です」等のラベルが認められた。

6) 【社会が看取る時代の流れ】

このシンボルマークには、「家ではなく病院ではなく施設で看取りを重視する時代の流れに高齢者の現在の状況を思う」のラベルが認められた。

7) 【介護職の専門性を尊重する】

このシンボルマークには、「介護職・看護職はお互いに忙しいが経験によるケアのこだわりを無くして介護の専門性を確立させて欲しい」等のラベルが認められた。

V. 考察

看護職の取り組みとその関連を考察する。

1. 【慮（おもんばか）り苦痛を緩和する】

介護老人福祉施設でターミナルケアを目指している看護職は「慮（おもんばか）り推察するようなケアがターミナルケア」と考え、高齢者に対して思い測り配慮しながら生活を整えて、出来るだけ苦痛を取り除くための援助を探り、慮（おもんばか）るケアを実践していると考えられる。死が近づいて生命力が衰退している、声にならない高齢者の声を聞き取り、それまでの高齢者の生活を背景に細やかな観察と繊細なケアを行っていると考えられる。ヴァージニアA.ヘンダーソンは、看護活動に「安楽な死」を位置づけており、このような援助について「患者の皮膚の内側に入り込む看護師は傾聴する耳を持っているに違いない。言葉によらないコミュニケーションを敏感に感じ、また患者の感じていることを色々な方法で表現するのを励ましているに違いない」と述べている

(Henderson, 1961/2009)。推察するような配慮に満ちたケアは、高齢者の皮膚に入り込むような一体感と言葉を越えたコミュニケーションを通じて行われ、看護職が死にゆく高齢者に対して【慮り苦痛を緩和する】ターミナルケアを実践するのは、ヘンダーソンの目指す「安楽な死」を意味し、看護の専門性とも考えられる。

2. 【高齢者をトータルに捉えるケア】

病院ではなく、生活の場であり生活の延長線上の介護老人福祉施設における看護職のターミナルケアに、看護職は、「生活史を含め統合体として高齢者をとらえたい」や「ターミナルケアをめぐってトータルな学を充実させたい」等から、生活施設である介護老人福祉施設で長い生活歴をもつ高齢者を、生活史やターミナル期である身体状況も含めてトータルに対象を捉えてケアを実践していると考えられる。これは、疑似家族的な役割を担う介護老人福祉施設での特徴的なケアであると考えられる。看護職が、高齢者を生活史や疾患を抱えた対象として捉えるのは、ナイチンゲールの三重の関心の枠組み（薄井, 1996）で示されているように、「対象に知的な関心を注ぐ」、「心のこもった人間的な関心を注ぐ」、「実践的、

技術的な関心を注ぐ」ことであり、身体、精神、社会、霊的な側面を含めて【高齢者をトータルに捉えるケア】を実践していると考えられる。

ターミナル期にある高齢者の持てる生命力を支え、生命力の消耗を最小限に体内の回復過程を助けて身体内部バランスを整え、生命過程も整えられて、より「安楽で健康的な死」（身体の各器官がバランスよく衰えてゆく、より自然に近い死への過程）を目指す実践（金井, 1993）に繋がっていると考えられる。

3. 【家族の様なケア】

看護職は、医師や看護職が24時間常駐し、高度で積極的な医療と看護が提供される病院ではなく、数人で施設ケアを行っている。介護老人福祉施設は、身寄りのない高齢者や複雑な介護上の事情を持つ高齢者が入居し、職員は家族の居ない高齢者には家族に代わる思いで、また家族が付き添う場合では家族をサポートしてターミナルケアの実践を目指していることが考えられた。ターミナル期の高齢者は個々に多様な症状を併発し、介護職員や家族は、その症状の反応の一つ一つに心を乱されると考えられる。

ヘンダーソンは「極度に他人に頼らなければならない状態、たとえば昏睡やひどく衰弱している状態にあるときのみ、看護師は何が患者にとって良いことかを患者と共にと言うよりは患者に代わって決定することが容認される」と述べている (Henderson, 1961/2009)。このようにターミナル期は身体状況が低下し意思表示ができない高齢者や、家族が傍らにいても高齢者本人にとってふさわしい意思決定ができない場合が介護老人福祉施設では想定できるが、看護職は介護職と共に家族を支え、身寄りのない高齢者には彼らの家族の代行者となり、看護の専門性として【家族の様なケア】を目指していると考えられる。

4. 【ターミナルの段階を理解できず悩む】

看護職は、「食べられないターミナルの状況を理解出来ず介護職と看護職も点滴を希望する」のラベルから、介護職と共に死を目前にして徐々に身体状況が低下してゆく高齢者を見守り援助していると考えられる。ターミナル期は、食事が食べられなくなり生体反応も生理的に乏しくなるプロセスを辿り、ADLの低下、低い栄養、嚥下困難、尿失禁、せん妄、うつ、出血傾向、意識障害などの高齢者特有の老年症候群を併発していることが多い。これは加齢変化と体動の減少に伴う廃用症候群が重なって生じるもので、多臓器が関与した症状・疾患であるとされている（鳥羽, 2003）。このようにターミナル期の高齢者は日々身体機能が低下してゆくと人工の栄養に頼らざるを得ず積極的な援助を見出せないことを示すものである

と考える。そして介護施設では、病院のように医師が常駐し、医療機器が有るわけではないので、死が近い高齢者を目の当たりにして看護職は、ターミナル期の高齢者の詳細な変化をとらえ難く【ターミナルの段階を理解できず悩む】思いを抱いていると考えられる。

5. 【最後までその人らしさを大切にすのケア】

看護職は、「最期のステージに自覚的に向き合うケアが大切です」のラベルから、生活の場である介護老人福祉施設での最期の看取りにおいて、看護職は死が近い高齢者に対して最低限の医療処置や対症看護で、高齢者のその人らしさを大切にすのターミナルケアを目指していると考えられる。これは、村井が「出来る医療はすべてやるのではなく、まず終末であるという認識を持ち医療以外にも有用な手段があることを考え有終のケアとして専門職はケアに当たる必要がある」（村井, 2002）と述べていることに重なることを考える。看護職は、特に人生の総決算でもあるターミナルケアにおいて、最後までその人らしく、その人らしい人生を全うできるように自覚的に死と向き合うケアを重視していると考えられる。

6. 【社会が看取る時代の流れ】

看護職は、「家ではなく病院ではなく施設で看取りを重視する時代の流れに高齢者の現在の状況を思う」のラベルから、自宅ではなく病院でもなく介護老人福祉施設でのターミナルケアを実践していると考えられる。2006年に看取り介護加算が創設され、高齢者の看取りを【社会が看取る時代の流れ】と捉え、社会的に施設で最期を迎える高齢者のケアに対応するものと考えられる。その背景には、日本における核家族化により施設での高齢者の看取りへの期待があると考えられる。看護職は、超高齢社会の高齢者が終焉を迎える場所が、病院や在宅から施設へと移行していると受け止め、【社会が看取る時代の流れ】の中で、その社会的役割を看護職として果たしていると考えられる。

7. 【介護職の専門性を尊重する】

介護老人福祉施設の看護職は、限られた人数で昼間勤務をしている。「介護職・看護職はお互いに忙しいが経験によるケアのこだわりを無くして介護の専門性を確立させたい」とあるが、施設で看取りが時間帯である夜間は介護職のみの勤務であり、看護職は介護職の専門性を尊重し、連携したターミナルケアをする必要性を認識していると考えられる。N県の介護老人福祉施設での看取りに対する職員の意識調査では、55.7%の職員が積極的に取り組みたいと報告している（清水, 2007）。これは、積極的ではない職員も存在することを示す。介護老人福祉施設のターミナルケアにおいては、人員など十分なケアの体制

が整え難いことから、経験が浅い職員もターミナルケアを実践している現状があり、施設内でのターミナルケアの対応について不安を抱いている職員が多いとされている（清水, 2007）（林, 2009）。ターミナル期にある高齢者の心身のアセスメントは、解剖学や生理学的知識など科学的な根拠が必要であり、そのために看護職は介護職をサポートする必要があると考えられる（流石, 2006）。それは、高齢者がターミナル期最期までその人らしく、質の良いケアによって高いQOLが維持されつつ、高齢者が安楽な死を迎えられるようにするには、看護と介護の職種が互いに、その役割を尊重して連携する必要があると考える。

8. 各取り組みの関連

看護職における7つのターミナルケアの取り組みは、以下の関連をもつと考える。

看護職は、まず【慮（おもんばか）り苦痛を緩和する】ケアを行い、【高齢者をトータルに捉えるケア】や【家族の様なケア】を考えて看取りをするが、施設ケアの限界に【ターミナルの段階を理解できず悩む】気持ちを抱きながら、【最後までその人らしさを大切にすのケア】を実践している。そこには、【社会が看取る時代の流れ】と【介護職の専門性を尊重する】連携が必要となる。このような介護老人福祉施設の看護職のターミナルケアの取り組みとその関連を図1に示す。

VI. 結論

介護老人福祉施設における看護職のターミナルケアへの取り組みを明らかにするため、7名の看護職に面接し、KJ法に準ずる分析を行った結果、看護職のターミナルケアの取り組みとして、7つのシンボルマークが抽出された。また、それらの間には相互に関係性があることが示唆された。後期高齢者の死亡が増える時代を迎えた日本においては、介護老人福祉施設職員のターミナルケアへの学習の機会が必要であると考えられる。

謝辞

本研究への参加を快く承諾して下さった、介護老人福祉施設の施設長とインタビューに応じて下さった研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。そして、分析方法についてご指導下さった川喜田晶子先生に深く感謝申し上げます。

本研究は、滋賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻に提出した修士論文の一部に加筆修正したものです。

引用文献

1. 林 幸子：特別養護老人ホームにおける死の見取りの実態—その2 G県下CとT地区の看護職を対象に一

- 岐阜県看護大学紀要 第4巻1号:45-51, 2004.
2. 広井良典: ケア学. 医学書院 東京 53-59, 144-149, 1997.
 3. 広井良典: 死生観を問い直す. ちくま新書, 東京, 65-69, 78-80, 1997.
 4. 広井良典: ケア学. 医学書院, 東京, 53-54, 1997.
 5. 川上嘉明: 高齢者の死に行く過程を整える終末期ケアの視点. (3) 総合看護No126, 2001.
 6. 厚生労働省国介護保険・高齢者保健福祉担当課(2011) <http://www.hmv.co.jp/product/detail/34155027>. 2011-01-03.
 7. 厚生労働省健康政策局総務監修: 終末期医療に関する調査など検討会報告書 (2004) <http://www.arsvi.com/b2004/0006.htm>. 2011-01-03.
 8. 小山千加代: 特別養護老人ホームにおける看取りの実態と課題に関する文献検討. 老年看護学雑誌, 14, 159-427, 2010.
 9. 三宅貴夫: 終末期認知症の医療に関する意思決定. 老人精神医学雑誌, 10(10):1255-1229, 1999
 10. 村井淳志: 高齢者の終末期ケア. 月刊総合ケア, 12(4), 45-50, 2002.
 11. 岡本祐三: 介護保険の歩み. ミネルヴァ書房, 東京, 60-67, 2009.
 12. 清水みどり: 特別養護老人ホーム職員の死の看取りに対する意識. 新潟青陵大学紀要, 第7号 51-63, 2007.
 13. 流石ゆり子: 高齢者の終末期のケアへの現状と課題 老年看護学, 11(1), 70-78, 2006.
 14. ヴァージニア・ヘンダーソン: 湯楨ます他 訳 看護の基本となるもの. 日本看護協会出版, 14-15, 18-19, 1986.
 15. 薄井担子: 看護学原論. 講義, 現代社, 東京, 64-68, 2005.

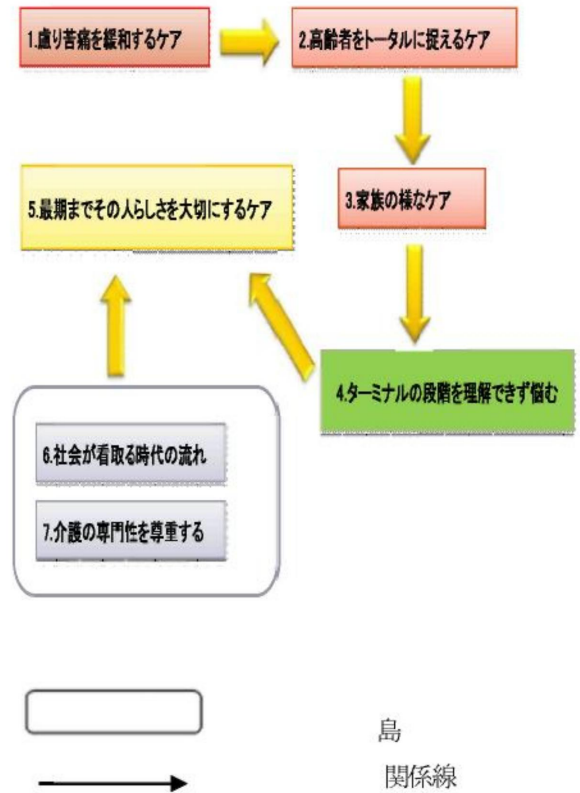


図1 看護職の取り組みの関連